

白氏文集 十七 西涼伎（一）

加藤淳平

白樂天の時代、唐の國勢衰へ止まず。盛唐期、西域に於ける唐の軍事的據點は、今の中國甘肅省南部の町涼州なりき。そはかの盛唐期の詩人王翰の涼州詞（葡萄美酒夜光杯欲飲琵琶馬上催 醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回）に知らる。かの安祿山の亂より三十乃至五十年後の貞元年間（樂天の十代から三十代、日本ではほぼ延暦年間）、涼州より西の所謂「西域」、已に唐の領域に非ず。本詩は涼州の獅子舞を藉りて、唐の封疆の臣たる邊境の地の將を批判す。

西涼伎（一） 刺封疆之臣也 西涼の伎 封疆の臣を刺る也

西涼伎 假面胡人假獅子 西涼の伎 假面の胡人 假の獅子

刻木爲頭絲作尾 木を刻して頭と爲し 絲を尾と作し

金鍍眼睛銀帖齒 金を眼睛に鍍し 銀を齒に帖はる

奮迅毛衣擺雙耳 奮迅の毛衣雙耳を擺ふる

如從流沙來萬里 流沙より 萬里を來たるが如し

紫髯深目兩胡兒 紫髯深目の兩胡兒

鼓舞跳梁前致辭 鼓舞跳梁 前んで辭を致す

應似涼州未陷日 應に涼州未だ陷ちざるの日

安西都護進來時 安西都護より 進め來たりし時に似たるべし

須臾云得新消息 須臾にして云ふ 新消息を得たりと

安西路絕歸不得 安西路絶えて 歸るを得ず

泣向獅子涕雙垂 泣きて獅子に向へば 涕雙び垂る

涼州陷沒知不知 涼州陷沒す 知るや知らずや

獅子回頭向西望 獅子頭を回し 西に向つて望む

哀吼一聲觀者悲 哀吼一聲 觀る者悲しむ

貞元邊將愛此曲 貞元の邊將 此の曲を愛す

醉坐笑看看不足 醉坐して笑ひ看る 看れども足らず

享賓犒士宴三軍 賓を享し士人を犒ひ 三軍を宴すれば

獅子胡兒長在目 獅子胡兒 長く目に在り

（大意）西涼の藝能の獅子舞は假面の西域人とその操る獅子が演ずる。木を彫刻して獅子の頭とし、絲を束ねて尾を作る。眼玉は金の鍍金、齒には銀紙を張る。敦煌の西の流沙地帯から一萬里を來たかのやうだ。紫の髯で彫りの深い目の假面の西域人が二人、鼓を打ちながら踊つて飛んだり撥ねたりした後、前に進み出て、「この獅子は涼州が陥落しない前に、西域庫車の安西都護様から參つた進物そっくりでございます」と云ふ。少し踊つたところで直ぐまた云ふ。「新しい情報が入りました。安西へ向かふ道が不通になり、私共は歸れ

なくなりました」と。泣きながら獅子を見て云ふ。「兩眼からは、涙が二筋流れる。「涼州が陥落したことをお前は知ってゐるか」と。獅子は頭を回して西の方を眺める。悲しげに一聲吼え、観る者は悲しむ。貞元時代の國境警備軍の司令官は、この藝能が好きである。酒の席によく呼んで笑ひながら見る。何度見ても見足りない。客をもてなすにも、部下の將校たちをねぎらふにも、軍の大宴會でも、この獅子舞を演じさせたから、獅子と西域人の姿は、皆の目に長く焼き付いた。

(平成二十九年三月十五日受附)